

これが学問
我が学問
なり

終始一貫
追い求める
学問の
面白さは

北里大学北里研究所病院副院長
内視鏡手術センター長
北里大学医学部教授

渡邊昌彦



渡邊昌彦(わたなべ・まさひこ) / 1979年慶應義塾大学医学部卒業、同大学外科学教室入局。飯田市立病院、川崎市立病院、国立がんセンター研究所、東京電力病院などを経て、88年米国ワシントン州立大学留学。92年より慶應義塾大学医学部助手、2000年同大学講師。03年に北里大学医学部教授に兼任。07年より北里大学北里研究所病院内視鏡手術センター長を兼任。15年より同病院副院長を兼務。医学博士。



内視鏡外科手術の最前線を、 次の世代のスタートラインに

かつて外科の世界では「偉大な外科医ほど大きく切開する」という風潮があった。これを過去のものにしたのが内視鏡外科手術である。

この手術では、患者の腹部や胸部に小さな穴を開け、そこから細長い器具やカメラを挿入し、モニターの拡大画像を見ながら手術を行う。従来の手術に比べ傷跡は小さく、回復が早いのも特徴で、生存率は開腹手術と遜色ない。現在、大腸や胃、食道、肺など様々な部位のがんをはじめ、胆石症やヘルニアなど幅広い手術に適用され、実施件数も右肩上がりが増えていく。

北里大学医学部教授の渡邊昌彦は、内視鏡を用いた外科手術、中でも日本人の死因の上位を占める大腸がんの内視鏡手術の先駆者として知られる存在だ。現在、次代を担う医師の育成と臨床治療の第一線に携わりつつ、

内視鏡外科学会など多くの学会組織のリーダーとしても活躍している。

渡邊の父親は大学教授を務める内科医で、母親の実家も医者だ。本人も幼い頃から北里柴三郎やコッホをはじめ多くの医学者の伝記に親しみ、高校卒業後は自然に医学の道に進んだ。しかし、決して高い志や理想を抱いていたわけではないという。

「外科を選んだのも、父親を訪ねてくる医者の中で一番遊び、楽しそうにしていたのが外科の先生だったから。根はミーハーな人間なんです(笑)」

浪して入学した慶應義塾大学医学部ではヨット部でレースに熱中。遊びにも勉強にも貪欲に取り組み充実した日々を過ごした。卒業後、いくつかの病院の外科勤務を経て、30歳で国立がんセンター研究所の病理部へ。ここで日本で初めて保険収載されることになる腫瘍マーカーを開発するという

▶画期的な成功を収めた日本初の大腸がん内視鏡手術の光景。右が渡邊、左は盟友の大上正裕医師(故人)



◀「良質な外科医を育てる教育システムをつくっていきたい」と今後の目標を語る渡邊



成果を上げ、35歳のとき米国ワシントン州立大学に留学する。この期間中に渡邊は、その後の医療人としての方向性を決定づける技術——内視鏡外科手術を知ることになる。

「自分と同時期にカナダに留学していた学生時代からの親友である大上正裕が、開発されたばかりの内視鏡外科手術を見学して、『すごいものを見た!』と興奮して伝えてきたのです。でも、自分はピンときませんでした。その後、一足先に帰国した大上は日本で内視鏡手術を成功させ、一躍時代の寵児になったのです。彼に先見の明があったのは明らかでした」

遅れて日本に戻った渡邊は、慶應の恩師、北島政樹教授(当時)に、大上氏とともに内視鏡外科手術に専念するよう求められる。未知の使命に戸惑う渡邊に大上氏は「俺がお前に必ず寄り添ってやる。数年後、お前

はこの分野で世界の第一人者になるんだ」と背中を押した。

この言葉はほどなくして現実となる。1992年6月、渡邊は大上氏とともに日本初の内視鏡による大腸がん手術に成功。以降、千数百例もの手術を手掛け、大腸がん内視鏡手術の達人として世界的評価を得る。渡邊と一心同体となって内視鏡外科手術の発展に尽力した大上正裕氏は、2000年に47歳の若さでこの世を去った。

「天才的ビジョンと行動力を持つ彼が生きていれば、日本の医療は変わっていたはず」と、その早すぎる死を惜しむ。2003年、北里に活動の場を移した渡邊が今、最も力を注ぐのが若手外科医の育成だ。

「自分が40年近くかけて到達した場所を若い人のスタートラインにしてあげたい。そうすれば、やすやすと私 のことも乗り越えてくれるでしょう」